

Youngbuilder

ヤングビルダー

東京土建一般労働組合府中国立支部 青年部 第 42 号 (2011年12月12日) 発行責任者 三浦康廣



府中国立青年部は2011年11月19～21日、二泊三日で、平和学習として沖縄に行ってきた。

参加者は男子8名女子1名、合わせて9名の参加でしたが、他団体との交流として民青（日本民主青年同盟）から稲浦ゆいさんが参加してくれました。

日程

1日目

平和祈念資料館→旧海軍司令部壕→普天間基地見学

2、3日目

それぞれのテーマに沿ったの自由学習

事前学習

8月6日には実際に沖縄に行く前に沖縄の事を知っておこうと言う事で、事前学習として「青年劇場 府中公演 プレ企画「沖縄と普天間」」と言う企画に参加しました。故 牛島満氏（沖縄戦当時の日本軍の指揮官）の孫に当たる牛島貞満さんの公演を聞きました。



日本に復帰した時に戦争が終わっていたと思っていたのですがそうではなく、沖縄の現状を知り、未だにアメリカ軍による差別が続いている事に驚きました。



バスの中で…

～感想～

11月19日出発当日、AM 7時に出発にも拘わらず数名遅刻。先が思いやられました。何だかんだ那覇空港に着き、

遂に、沖縄行きが実現しました！



平和祈念資料館にて。

外へ出ると生憎の雨+湿気による蒸し暑さが襲いました。高校生の修学旅行に行った時のあの暑さを忘れて居ました。

到着し、マイクロバスに乗り昼食会場へ。バイキングだったので皆お腹いっぱい食べ、平和祈念資料館へ。

中はまず沖縄戦に至るまでの歴史、きっかけなど展示してありそこで知った上で次に 映像、実物等を見ました。日米両方合わせて20万656名の戦没者。

一言では言い切れない感情が込み上げて来ました。海軍司令部壕ではほぼ当時のまま残されており手榴弾の跡司令官室は今でも座っているようなほどのものでした。

見終えた後、今自分がどれだけ幸せか考えたら逆に胸が締め付けられました。



首里城

2日目は首里城へ行き琉球

建築を見て驚きっぱなしでした。高校生の時は建築物、歴史的なものを見ても正直感心は無かった。けどほんの数年経つだけでこんなに心動かされるとは思いませんでした。全てを通して言うことでした。憲法9条、これは絶対にまもらなくては行けないと言う事を改めて実感しました。

【三浦康廣 記】

今回の沖縄平和学習では平和祈念資料館、旧海軍司令部壕にいきました。



←旧海軍司令部壕

資料館に行った時に感じたことは、広島や長崎の時と違う悲惨なものがあったんだと思いました。広島や長崎では原爆の投下によって一瞬のうちに広範囲にある物や人がなくなったのに対して沖縄では、徐々に隠れている場所なども追い詰められていくという戦争でし

た。どちらも恐怖に怯えて過ごしたと思いますが、自分は沖縄のほうが悲惨なものだったのでは無いかと思います。

旧海軍司令部壕は高台にあり、カマボコ状に掘り抜いた横穴をコンクリートと杭木で固めたところ。ここでは下士官室や兵員室が壕内にニヶ所、どちらも13平米の広さで戦争が激化した時には四千名もの兵士が集まり休息を取っていました。その中でも多くの兵士は立ったまま休息や睡眠を取っていたそうです。他には幕僚室という部屋がありそこでは手榴弾で自決した時の破片のあとが残っていました。



→壁に残る傷跡

原水禁に行ったときにも思ったのですが、戦争をしてもなにか一ついいことはないしなにも生み出さない。残るのは悲しみと傷跡だけだ。戦争はなにがあってもしてはいけないと思いました。それは日本だけではなく世界にも言えることだと思いました。

【関谷勇歩 記】



沖縄の復興と世界（地球）平和を願って嘉数高台に建てられた展望台からは普天間基地が一望できる。展望台の上にある石碑には復興を願う詩が書かれていました。

今回、沖縄平和祈念資料館を訪れ、「戦争の悲惨さ」というものを改めて感じました。



読谷村にて。沖縄の土には、今なお多くの不発弾と遺骨が残っています

小中学生の頃に授業の一環として勉強した事もありましたが、この歳になり命の重さや尊さと言うものを強く感じるようになりました。多くの人の命を奪い、国のために命を懸ける。戦争というものは金や領土の奪い合いだけでなく、それ以上のものの奪い合いだと思います。

米国軍の侵略方法、それに対する日本兵の策略。

今、この時代では考えられないようなものでも、その当時はそれが最善案とされ生きること、勝つ事を考えた結果だったのだと思います。

平和祈念館で、多くの写真を見ました。米国からの攻撃を受け亡くなった日本兵。道端に佇む、幼い子。その当時の服なども保管してあり戦争の凄さを物語っていました。

旧司令部壕では、まさにアリの巣状態でありガイド用の方向表示や、誘導灯がなければ一瞬で迷ってしまいそうでした。この地下20メートルを超える位置で、海軍は戦う準備をしていたそうです。この戦争で日本は米軍に負け、その傷跡がいくつも沖縄に残っていました。平和祈念資料館にある石碑や、未だ発見されていない不発弾。

おそらく、不発弾を探して地面を掘り起こしていれば、その当時の兵士の骨も出てくると思います。

何よりも、普天間基地。市街地内にある米軍基地では有名ですが、高い位置からこの基地を見て、これほど近くに人が住んでいるとは思っていませんでした。米国でも、世界一危険な場所であるという認識はあるそうですが、それを解っていて、戦争の恐ろしさも解っていて、なぜ未だに変化が無いのかとても不思議に思いました。戦争をすることで、国は潤うかもしれませんが、それと引き換えに失うものもあるはずで、これを天秤にかけ、どちらを取るか。将来を考えた判断をして頂きたいと思いました。

【山崎 龍 記】

青い空、白い雲、サトウキビ畑の向こうからは陽気



アメリカ軍上陸の碑。この時の激しい砲弾によって地形が変わってしまいました。

な三線と笑い声が響いてきます。

しかし、かつてこの美しい島で美しいもの全てが灰になり、沢山の笑顔が失われました。戦争は何も生み出さないだけではなく、大切なものを多く失うことになるのです。私はこの平和学習でこの事を強く感じました。

2日目、私は自転車で読谷村（よみたんそん）に行きました。米軍が初めて沖縄

の本島に上陸した場所です。海の見える小高い丘には見渡す限りサトウキビ畑が揺れていました。

ここにはこんな話があります。米軍が上陸した時、1キロ離れた2つのガマ

（自然壕）に住人が逃げ込み、片方では集団自決で半数が亡くなり、片方は全員が助かったのです。チビチリガマへは140人ほどが避難していましたが、初めに竹槍で突撃した2人に加え、そこにいた日本兵の「生きて虜囚の辱めを受けず」の号令のもと、捕虜になる事を恐れて母は剃刀の刃で娘を殺し、親子や老若男女が殺し合う地獄絵図と化しました。その結果68人が犠牲になりました。

一方、シムクガマの壕の中

には1000人ほどが避難しました。入り口の外からの米軍の投降を促す声に自決しようとする人もいましたが、リーダー格の2人は「命（ぬち）どう宝」（命こそ宝）と言い、英語が話せたために米軍と交渉し「抵抗しなければ殺さない」と米軍が約束したことを伝え、ガマの1000人全員が無事に生き延びることが出来ました。私はこの話を知り、命

の大切さを学びました。今でも米軍による犯罪が多い中、法律が改正されました。内容は、「基地の外の沖縄県内の犯罪で日本人が被害に遭い、米国で裁判されない場合は日本で裁判を行なうことが可能」と言うことです。これは県民が一体となって抗議した成果です。県民の平和への思いは今も生きているんだと思います。

【北村 真宏 記】



沖縄の楽器「三線（サンシン）」を弾いていたおじいちゃん



嘉手納基地バザーにて。最近では一部ですが日本人も基地に入ることが出来ます。



沖縄独特の建築



←チビチリガマ

1日目の夜

